

『儒学三部作』における学派分類について

杉山亮

井上哲次郎の『儒学三部作』は様々な論者によって言及されつつもその学的価値はほとんど無視されてきた。その学的貢献に対する評価は大まかに分類して①江戸儒学の系統だった歴史叙述であること。②西洋の思想史研究の方法論を始めて儒学に用いた研究であることである。上記のような評価は井上の思想史研究に対する貢献の一端を解き明かすものではあるが、『儒学三部作』の学派分類がいかなる意図に基づいて成され、今尚継承され続けていることへ十分な説明にはなっていないのではないか。本報告は、『三部作』の叙述を同時代のパースペクティブの中で検討することでその答えを見いだそうとする試みである。

本報告では、まず『日本陽明学派之哲学』を検討する。井上は同書で内村鑑三を始めとするキリスト者が中江藤樹らをキリスト者の起源とする言説を批判すると共に、大塩中斎ら実践的陽明学者への批判を通じて「壮士」を批判した。また『日本古学派之哲学』では、福澤諭吉の「公德」論を用いて近代社会に必要な社交道德の日本に定着させようとする意図があった。さらに『日本朱子学派之哲学』では宗教の世俗化のテーゼを用いて日本の近代化を説明しようと試みた。

上記の分析から井上の学派分類には儒学史から「古学派」を「陽明学」及び「朱子学」から区別し、近代化に不可欠の道德観念を儒学史の中から析出する意図があったと考えられる。

以上を踏まえ、井上の学派分類が現代まで継承され続けている原因を考察する。井上が編纂した『日本倫理彙編』などの資料が現代も使用され続けていることなどがあげられるが、最も直接的な原因は井上の学術を根本的に批判する視角の欠如であろう。つまり、『儒学三部作』は政治的目的を達成するためになされた歴史叙述であり、その後の学問の細分化に伴い、井上の研究視角を批判する枠組みそのものが消失した結果、その学的枠組みだけがつまみ食いの的に利用され続けているのである。